

1980年代に入って、日本の社会を取り巻く環境は大きく変化した。高齢化、国際化、高度情報化、サービス化、ソフト化などの様々な「化」現象で表される社会のトレンドの変化が加速したのが80年代であり、さらに90年代に持ち込まれてきている。本調査研究では、これらの「化」の中でとりわけ国際化に着目する。

80年代の日本の社会、とりわけ東京を始めとする大都市圏で目に見える変化として顕著になってきたのは、様々な国籍を持った、肌の色、顔つきの違う人々が日常的な生活場面において数多く出現してきたことである。

その背景については第1章で触れるが、注目したいのは、日本国内で様々な形で就業、就学する機会をもつ外国籍の人々が、80年代に激増した事実の持つ重みである。これらの人々の来日の主目的は、就学、就労であっても、それらの人々が日本の大都市に住み、生活をする、そして日本人と様々なチャンネルを通じて日常生活レベルにおいても接触、交流することが増大することは十分に予測される。戦前期においても実は、外国人が日本の都市社会に集住した経験はあったのであるが、その正負の経験は殆どわが国には蓄積されないまま、今日のいわゆる国際化現象を迎えているといえよう。この国際化の及ぼす影響は多面にわたるが、本調査研究では、国際化時代における都市計画の課題がどのようなものとなるのかとの問題意識の下に、調査研究を進めている。

第1章では、国際化が日本の大都市にどのような影響を及ぼすのかという点についてやや広い角度から問題を整理している。

現在の日本で起こっている国際化現象は、まだ萌芽的な要素が多く、実態も十分に把握できていない部分が多い。そこで、第2章、第3章では、日本より早く1960年代から外国人労働者の導入を積極的に進めたドイツ（旧西ドイツ）における国際化がもたらした歪、問題点について整理し（第2章）、それを克服するためにドイツ各都市で進めている居住環境整備を通じた外国人とドイツ人との共生への努力の事例について紹介している（第3章）。

実態の把握面でも、都市計画的課題を摘出する上でも不十分な点が多いが、本調査研究の予備的整理を基に、今後のわが国の国際化時代の都市計画課題の整理とその解決の方策について研究を進めていきたい。